

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18720146  
 研究課題名（和文） 日本人英語学習者における心的辞書の発達過程  
 研究課題名（英文） The developmental processes of the mental lexicon for Japanese EFL learners  
 研究代表者  
 田頭 憲二（TAGASHIRA KENJI）  
 広島大学・外国語教育研究センター・助教  
 研究者番号：00403519

研究成果の概要： 本研究では、日本人英語学習者の心的辞書の発達過程を明らかにすることにより、学術的な基礎研究として、(1)日本人英語学習者の心的辞書の発達過程が明らかとなり、(2)実際の英語教育現場に対する示唆が導かれた。また、教育実践に資する貴重な資料として、(3)教授場面における効果的な語彙の教授方法が明らかとなり、(4)実際の教授場面での語彙の教授順序に関する情報提供となる、という成果があげられた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	600,000	0	600,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	150,000	1,750,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語，教育学，語彙習得

#### 1. 研究開始当初の背景

1980年代より、第2言語習得研究において語彙研究に関する多くの報告がなされてきた。これらの先行研究から数多くの英語教育に対する知見が得られているが、幾つかの問題点が挙げられる。

問題点1：多くの研究がどの教授法が効果的であるかの記述的な研究に留まり、結果に対する説明的、または分析的な観点を欠いた、理論的モデルを欠いた状態であること。

問題点2：心的辞書の表象を調査する心理言語学的研究と、教育的示唆を求める研究との

間に明らかな溝が見られ、心的辞書研究における研究結果を応用しようとする試みが欠けていること。

(1) 言語教授場面において語彙指導を効果的に行うためにも、語彙の習得過程を明らかにすることは重要であるにもかかわらず、現在まで、どのように語彙が習得されるのかという発達過程が解明されていない。このような状況において、実際の教授場面において教授・学習後の語彙項目がどのように記憶され、その後どのような過程を経て心的辞書へと含まれるのかという心的辞書の変容・発達過程について明らかとする必要がある。

(2) 現在まで、第2言語語彙研究では、どのように語彙が習得されるのかという習得過程を明らかにすることは、多くの研究者によりその重要性が指摘されてきた。そして、近年、Jiang(2000)において、学習者の語彙習得段階に関する仮説の構築が試みられている。しかし、これらの仮説は全てESL(第2言語としての英語)におけるデータを基に構築されたものであり、EFL(外国語としての英語)である日本の英語教育において、そのまま応用が可能であるかの検証は未だなされていない状況である。そのため、日本の英語学習者についての検証を行う必要がある。

## 2. 研究の目的

本研究においては「日本人英語学習者における心的辞書の発達過程」を明らかにすることを目標とし、日本人英語学習者に見られる心的辞書の発達過程を明らかにすることを目的とした。具体的には、以下の4点が挙げられる。

目的1：第2言語習得研究の知見からバイリンガル心的辞書モデルの概観を行い、日本人EFL学習者の第2言語の語彙習得における発達過程と、その中でのL1語の果たす役割を明らかにすること

目的2：意味転移仮説の検証を行うことにより、L2心的辞書の理解段階および発達段階におけるL1語の意味情報の重要性を指摘すること

目的3：実際の教授場面においてL1語の意味情報が語彙教授に与える影響を明らかにすること

目的4：日本の英語教育における具体的指導のための基礎的資料とすること

## 3. 研究の方法

本研究の用いた研究の方法としては、大きく以下の3つの手法が使用された。

### (1) 文献研究

現在までの第2言語語彙研究の先行研究を敷衍し、従来の研究における問題点を指摘することを目的とした。具体的には、現在までに出版もしくは投稿された第2言語語彙研究分野において学習者の語彙の発達過程がどのように扱われてきたのかの考察を行うとともに、語彙の発達過程の解明の必要性をこれまでの先行研究の傾向および問題点を指摘することにより明確化した。

### (2) 実験研究(実験1, 実験2)

上記の文献研究より、心理言語学的語彙習得モデルの主張する心的辞書の仮説的発達過程についての検証を行うことを目的とした。具体的には、日本人英語学習者を対象とした実験を実施し、心的辞書の仮説的発達過程の妥当性の検証を行った。

### (3) 教授介入研究(実験3, 実験4)

(2)より明らかとなった日本人英語学習者の語彙の発達過程を基礎的データとして、実際に教授介入実験を行い、今後の英語教育の教授、学習の両視点から教育的示唆を導き出すことを目的とした。具体的には、学習者の使用する学習方略の形態よりL1語の意味情報の重要性を指摘した後、L1語の親密度の影響を考慮に入れた教授介入実験を行うことで、親密度の違いが学習成績と干渉に与える影響を明らかにした。

## 4. 研究成果

### (1) 文献研究

現在までの第2言語語彙研究の先行研究を敷衍することで、従来の第2言語語彙研究における研究上の問題点を指摘し、今後の展望を示すことを目的とした。

結果、1980年代以降の第2言語の語彙研究者の主な関心が語彙の教授方法の効果比較であり、その結果、数多くの教育的、研究的な知見が得られている一方で、未だ多くの研究が記述的な研究に留まり、説明的な理論またはモデルに基づいた研究を欠いた状態であるということを指摘した。特に、語彙の習得過程を明らかにすることは重要であるにもかかわらず、現在までどのように語彙が習得されるのかという発達の観点が長い間解明されてきていないことが明らかとなった。そこで、第2言語習得研究におけるform-meaning connectionという考えと異言語間影響研究の知見から、第2言語の語彙習得におけるL1語の意味情報の重要性を指摘し、学習者はL2語の形式に既に持つL1語の意味情報を結びつけ、EFL環境における日本人英語学習者の場合、意味転移が起こりやすいと想定されることを明らかにした。

また、上記の2点を基に、現在までにバイリンガル心的辞書研究分野において提唱されてきた改訂階層モデル(Kroll & Stewart, 1994)、分散概念素性モデル(De Groot, 1992)、そして心理言語学的語彙習得モデル(Jiang, 2000)という3つの代表的なモデルの検証を行った結果、Jiang(2000)の心理言語学的語彙習得モデルが、上記の2点に最も適合することが判明した。

表 1. バイリンガル心的辞書モデルの概観と第一言語の役割

	RHM	DCFM	PMVA
心的辞書の発達段階	語彙連結から 概念媒介連結へ	—	習得順序、発達の道筋
L1 語の意味情報の 役割	L1-L2 方向のみにて 概念と L2 を媒介	L1 語の概念素性が 処理において影響	L2 心的辞書へと転移 L2 語の処理において 影響
FMC 構築	初期の段階において 構築されない	(構築される)	構築される
意味転移	(L1-L2 方向処理 において出現する)	出現する	出現する

注: RHM (=改訂階層モデル)  
DCFM (=分散概念素性モデル)  
PMVA (=心理言語学的語彙習得モデル)  
( ) 内については推測

そこで、心理言語学的語彙習得モデルの提唱する意味転移仮説に着目し、L2 心的辞書の理解段階と発達段階の 2 つの段階について、以下の 3 点を検証することとした。

- ① EFL 環境である日本人英語学習者においても、L1 語の意味情報の意味転移は見られるのか
- ② L2 入力量の少ない EFL 環境においても、習熟度の比較的高い上級学習者、また中級学習者を対象に実験を行った場合、L2 心的辞書内において意味範疇の再構築が行われているのか
- ③ L1 語の意味情報の重要性が確認された場合、語彙の教授において L1 語の意味情報は、その習得を妨害する要因となりうるのか

## (2) 実験研究 (実験 1, 実験 2)

日本人英語学習者を対象とした実験を実施し、心的辞書の発達過程の妥当性の検証を行った。

### ① 意味転移 (実験 1)

仮説としては、(a)EFL 環境である日本人英語学習者を対象に、L2 語の意味判断を課す課題を行った場合、L1 語の意味情報の影響を受ける、(b)一方、EFL 環境においても、習熟度の比較的高い上級学習者は、L2 心的辞書内において意味範疇の再構築が行われている、の 2 点であった。実験協力者は、日本人 EFL 学習者のデータが分析に使用された。用いられた課題は、意味判断課題である。

表 2 日本人上級 EFL 学習者の意味判断課題における平均反応時間および誤答率の平均値の差と検定結果

	意味的関連語ペア				t	p
	同一翻訳語ペア		異翻訳語ペア			
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
反応時間(ms.)	1347.81	233.09	1408.21	233.44	2.43	.02
誤答率(%)	6.61	4.91	9.83	6.15	3.11	.00

注: 有意水準 5% とした両側検定

この結果、第 2 言語の入力量の乏しい EFL 環境において学習を行う日本人 EFL 学習者は、上級者であっても未だに L1 語の意味情報を基に L2 語の処理を行っており、L2 心的辞書に転移をされた L1 語の意味情報の再構築を行うことは困難であることが明らかとなった。

### ② 意味範疇の再構築 (実験 2)

意味範疇の再構築の過程を更に明らかにするため、日本人 EFL 学習者を対象に、異なる課題を用いて調査を行うこと、L2 語の意味範疇の再構築における L1 語彙特性の役割について検証を行うことを目的とした。仮説としては、日本人英語学習者を対象に、意味範疇の判断を課す文章完成課題を行った場合、(a)中級学習者の L2 心的辞書内において、意味範疇の再構築は行われていない、そして、(b)その課題成績は、L1 語の意味情報の影響を受ける、の 2 点であった。実験協力者は、日本人 EFL 学習者のデータが分析に使用された。課題は文章完成課題である。

表 3. 文章完成課題における誤答率と各語彙特性との相関

	L2 語彙特性		L1 語彙特性	
	頻度差	親密度差	頻度	親密度
誤答率	-.41	-.57	-.50	-.83

注: L2 頻度差: JACET (2003) に基づく語頻度順位差、  
L2 親密度差: 横川 (2006) に基づく親密度の差  
L1 頻度: 天野・近藤 (2000) の全体頻度  
L1 親密度: 天野・近藤 (1999) の文字親密度

これらの結果、意味範疇の再構築は少なからず行われているが、未だ母語話者の持つ意味情報と同一のものとなっていないこと、その意味範疇の再構築の過程において L2 心的辞書内の L1 語の意味情報が核としての役割を果たしていることが明らかとなった。また、L2 語の意味範疇の再構築においては、言語入力の量と学習者による気づきが重要となり、言語入力の少ない EFL 環境においては、意味範疇の再構築を期待することは限りなく難しいと考えられ、L1 語と L2 語における意味情報の相違に学習者の注意を向け、意味範疇の再構築を促すための明示的な教授が必要となることが指摘された。

### (3) 教授介入実験 (実験 3, 実験 4)

反意語を同時提示する教授介入を行い、L1 語の親密度の影響を考慮に入れることで、親密度の違いが学習成績と干渉に与える影響を明らかにすることを目的とした実験を行った。

仮説としては、(a)反応語として提示される L1 翻訳語の親密度が高い場合、学習課題の成績が高くなること、そして、(b)親密度の高い L1 翻訳語を持つ反意語を提示した場合、学習者にとって混同が起りやすいこと、の 2 点であった。実験協力者は、日本人 EFL 学習者である。手続きとしては、学習段階において正確に L1 語で意味を記述し回答できるまで時間無制限で行なわれた。また、学習段階後に一定の期間をあけて多肢選択式のテストが行われた。

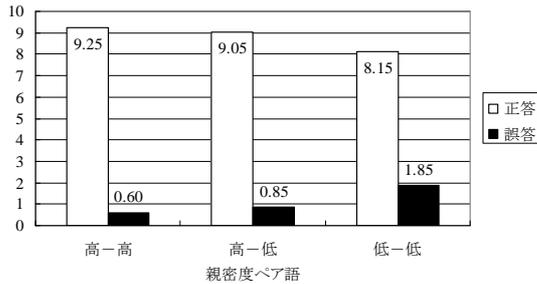


図1 親密度ペア語における正答と誤答の平均値 (実験3)

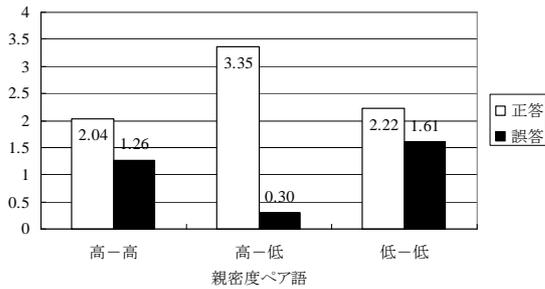


図2 親密度ペア語における正答と誤答の平均値 (実験4)

これらの結果、仮説に従い、L2 反意語の同時提示を行った場合、反応語である L1 親密度の違いにより反意語ペアの学習成績および干渉の度合いが異なることが分かった。

#### (4) 研究成果のまとめ

① 目的1として、第2言語習得研究の知見を応用した場合、語彙の習得過程においてL2語とL1語の意味情報を結びつけることが行われ、日本人 EFL 学習者の場合、意味転移が多く起こることが予想された。また、この2点を基に、バイリンガル心的辞書モデルの検証を行った結果、Jiang (2000) の心理言語学的語彙習得モデルが最も適合することを指摘した。

② 目的2としての日本人 EFL 学習者における意味転移の影響について、(a)意味転移仮説の主張に沿い、L1語の意味情報がL2心的辞書に転移をされること、また、(b)第2言語の入力量の乏しい EFL 環境において学習を行う日本人 EFL 学習者は上級者であっても意味情報の再構築を行うことは困難であること、(c)L2心的辞書に格納されたL1語の意味情報の再構築は少なからず行われているが、意味範疇の再構築は学習者にとって困難な課題であるとともに、(d)その再構築の過程において、L2心的辞書内のL1語の意味情報が核としての役割を果たしていることを指摘した。また、これらの実験の結果から、学習者の持つL1語が心的辞書の発達過程において重要な役割を持つことが明らかとなり、日本人英語学習者における心的辞書の発達

過程の一過程が明らかとなった。特に、L1語の親密度が、意味範疇の再構築において、コアとされる意味素性を規定する可能性が示唆された。

③ 目的3の意味転移の語彙教授に与える影響としては、L1語の親密度の違いにより反意語ペアの学習成績および干渉の度合いが異なることが分かった。これは、第2言語の語彙習得において、親密度の高いL1語が学習者にとっての認知的フックとなり学習の負荷が少なくなるとともに、L1語の親密度の違いによりL2心的辞書内における競合の度合いが異なることを示し、明示的に教授を行った場合においても、L1語の意味情報の転移を迂回することはできないこと、また、L1語の親密度という要因がコアとしての働きを果たすことが明らかとなった。

④ 本研究の結果、研究面としては、語彙習得における説明的・理論モデルの提供が行われ、また、教育面としては、理論的モデルに基づく語彙教授・学習への教育的示唆が導かれた。得られた本研究の研究成果は以下の3点にまとめられる。

- (a) 第2言語習得研究とバイリンガル心的辞書研究の知見を応用することにより、第2言語の語彙習得を心的辞書の発達段階の観点から明らかとしたこと
- (b) 現在の英語教育における語彙教授においては、L1語をできる限り使用しないことが推奨されている中で、L1語の重要性および学習者のL1語を上手く利用し活用する必要性を指摘したこと
- (c) また、その際のL1語の活用方法として、L1語の意味情報を加味し語彙習得に大きな影響を与える要因であるとの認識が教師に必要となることを指摘したこと

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 田頭憲二. (2009). 「第2言語習得研究における語彙の習得過程」『広島外国語教育研究』12, 217-232. (広島大学外国語教育研究センター). 査読有

② 田頭憲二. (2007). 「日本人英語学習者の L2 意味範疇の再構築における L1 語彙特性の役割」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 (文化教育開発関連領域)』56, 147-154. 査読有

③ Tagashira K. (2007). The influence of L1 semantic transfer on the development of the L2 mental lexicon. *Annual Review of English Language Education in Japan (ARELE)*. 18, 141-150. (全国英語教育学会). 査読有

④ 田頭憲二. (2007). 「第 2 言語語彙研究における語彙習得研究—理論およびモデルの構築を目指して—」『広島外国語教育研究』10, 219-237. (広島大学外国語教育研究センター). 査読有

[学会発表] (計 5 件)

① 鬼田崇作・田頭憲二. 「L2 反意語ペアの同時提示における L1 親密度の及ぼす干渉効果」大学英語教育学会英語辞書研究会・英語語彙研究会 第 2 回合同研究会. 2008 年 3 月 22 日. 麗澤大学.

② 田頭憲二. 「バイリンガル心的辞書モデルの変遷」大学英語教育学会英語語彙研究会望月科研講演会. 2008 年 3 月 1 日. 東京電機大学.

③ 田頭憲二. 「日本人 EFL 学習者の L2 意味範疇の再構築における L1 語特性の役割」第 33 回全国英語教育学会 大分研究大会. 2007 年 8 月 5 日. 大分大学.

④ 田頭憲二. 「L2 心的辞書の発達過程における L1 意味転移の影響」大学英語教育学会英語語彙研究会 第 3 回研究大会. 2006 年 12 月 2 日. 中央大学後樂園キャンパス.

⑤ 田頭憲二. 「日本人 EFL 学習者の L2 心的辞書における L1 意味転移の影響」第 32 回全国英語教育学会 高知研究大会. 2006 年 8 月 5 日. 高知大学.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

田頭 憲二 (TAGASHIRA KENJI)  
広島大学・外国語教育研究センター・助教  
研究者番号：00403519

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者